

**シンポジウム****脊椎内視鏡手術——最近の進歩****緒言**

守 屋 秀 繁\*

**■外科領域における内視鏡手術の普及**

90年代に入り外科領域での内視鏡下手術の発展にはめざましいものがある。従来と同じ手術を内視鏡下に行うというだけでなく、これまでの術式と全く異なった発想で手術が行われることもある。従来、外科手術は直視下に組織を切開し、剥離し、結紮し、縫合するといった手作業を行っていたが、工学技術の進歩とともに幾つかの作業が自動化されたり、明るい鮮明な視野の元に確実な操作が安全にできるようになってきた。内視鏡手術がこれほどまでに普及した理由は、少ない侵襲で効率的な手術が行える点であると考えられる。本誌上シンポジウムに参加いただいた山田英夫先生の所属する病院では現在消化器外科の約90%が内視鏡下の手術となっているそうである。

**■脊椎外科分野における内視鏡手術の導入・発展**

この外科領域での内視鏡手術の技術を脊椎外科の分野で応用する試みが数年前より始められている。胸腔鏡下の脊柱変形矯正手術、脊椎骨折に対する除圧固定術、腹腔鏡下または後腹膜腔鏡下の腰椎前方固定術、後方からの椎間板ヘルニア摘出術、後腹膜腔鏡下の椎間板ヘルニア摘出など脊椎外科の多くの分野で内視鏡手術が行われつつある。この誌上シンポジウムに参加いただいた各先生方は、我が国で最初にこの技術を取り入れ手術手技の開発に力を注いできた方々であり、現在もその手術手技を開発中である。本誌では脊椎に対する内視鏡手術の最新の手技、適応、治療成績について述べていただいた。論文文中にあるように、現在の内視鏡手術の技術をもってすればこれまで開胸、開腹してきた前方アプローチはもちろん、後方から脊椎にアプローチすることも技術的には可能である。また、術後起立歩行までの期間は短くなり、術後の鎮痛剤の使用量が少なくなったとの報告もある。しかし、手術時間や術中出血量の点からは必ずしも少ない侵襲とはいえない面もあり、今後も引き続き内視鏡手術器具、脊椎手術器具の開発を行う必要があると考えられる。

**■最小侵襲で最大効果を上げるために**

近年のQuality of Lifeを重視する社会にあつては、これまでのように術後長期間ベッド上安静を強いたり、術後疼痛の不完全なコントロールなど、患者にとって苦痛の大きな手術は避けられるようになり、患者はより快適な方法で治療を受

\* 千葉大学医学部整形外科教授

けたいと願うようになってきている。また、医療保険制度の異なる米国のように入院期間をいたずらに短くする必要はないと考えるが、我が国においても患者はより負担のない効率のよい治療法を選択したいと希望する傾向が強くなってきた。医療費の削減の観点からも、最少侵襲で最大の効果を上げるべく努力すべきであり、内視鏡下脊椎手術はそれらを解決する可能性を秘めた手術手技といえよう。

#### ■ 脊椎内視鏡手術が 21 世紀の新しい治療法となるために

この新しい術式が健全に発展していくためには従来の手術手技と比較した成績を明示することや、内視鏡手術特有の起こりうる合併症発生の予防策を確立する必要がある、さらに現時点での内視鏡手術の限界を見極めつつ確実に進歩させることが重要である。現在、米国では脊柱側弯症に対する内視鏡手術として胸腔から椎体前方にアプローチし矯正固定を行う方法と従来の後方 instrumentation 法との比較が行われていると聞いている。侵襲性、効率性、経済性などの面からの比較検討がなされているようであるが、脊椎内視鏡手術は将来性はあるが、現時点ではすべての面においてさらなる努力を必要とすると思われる。そして、内視鏡を用いなければ不可能な術式が出現した時に脊椎内視鏡手術は初めて従来の術式より優れたものとして評価されるであろう。

脊椎内視鏡手術が脊椎外科における 21 世紀の新しい治療法となるべく若い整形外科医の活躍が期待される。